



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人会代表 金子 敬
●事務局長 播磨 聡 (広島キリスト教会 TEL 082-293-8683)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

託された4つのお願い

関東学院六浦小学校 校長
(関東学院小学校 前教頭)

石塚 武志
いしづか たけし

「ムラホ」(こんにちは)、「アマホロ」(平和)「ムラコーゼ」(ありがとう)、「イマナインジーザ」(主は素晴らしい)。私が知るニャルワンダ語。

2005年5月、当時の関東学院学院長松本昌子先生からルワンダで働こうとしている佐々木和之さん支援依頼が関東学院小学校にあり、佐々木和之さんと会いました。その時、私は、それまで全く知らなかったルワンダとその国で起きたことを知りました。そこに佐々木さんは家族で移住し、働こうとしていました。「なぜルワンダなのですか。」「何が佐々木さんをルワンダに押しやるのですか。」

私がまずしたことは佐々木さんを知ること。佐々木さんと何度もメールのやり取りをしました。小学生にとってジェノサイド(大量虐殺)はあまりに衝撃的な出来事です。何をどう学んだらいいのか。佐々木さんの支援を小学校の教育活動としてどう位置づけられるのか。

次にしたことはルワンダを知ること。本を読みました。『ジェノサイドの丘(上・下巻)』『生かされて。』『ロメオ・ダレール～戦禍なき時代を築く～』。映画を見ました。『ホテル・ルワンダ』『ルワンダの涙』。ルワンダ大使と会いました。ルワンダコーヒーを購入し、飲みました。ルワンダの民芸品を『OneLove』の

吉田真美さん宅に行って購入しました。さらに、社会科の授業で児童と一緒にルワンダについて調べ、質問を考え、佐々木さんにメールをし、回答をいただき、学びを深めました。

そして、児童の宗教委員中心に「ルワンダ展」を企画開催しました。ルワンダ新聞『アマホロ』を発行し、全校児童に伝えました。

礼拝や聖書の授業で学年に応じて「ルワンダ」を覚えて祈りました。佐々木和之さんのご家族も小学校に来ました。佐々木さんは「平和構築」を「仲直り」という言葉に言い換えて話し、私たちに4つのお願いを託しました。

ルワンダのことを知って下さい。

伝えて下さい。

祈って下さい。

平和を創り出す人になって下さい。

ある6年生が言いました。「佐々木さんはすごいです。ぼくには祈ることしかできない。」しかし、この時すでに、この6年生は託された4つのお願いの一つを実践していたのです。

「イマナインジーザ」という賛美も「ムラホ!ムラコーゼ!」という挨拶も、本当の「アマホロ」(=仲直り)も、すべて主から与えられることを信じ、祈ります。

佐々木和之

ささきかずゆき

心に蒔かれた希望を信じて

ルワンダ、そして、アフリカ大湖地域に真の平和が実現することを信じ、一日一日を歩んでいきます。

■「平和構築」学士課程が認可

今年5月、ピアスの「平和構築と開発」学士課程が正式にルワンダ政府に認可されました！「今まで未認可のままやっていたの」、との声が聞こえそうですが、そのあたり、アフリカは大らかでするのでご心配なく。



＜ 『平和構築と開発』
週末コースの学生たちと ＞

これで、政府に公認されたルワンダ初の平和学学士課程が誕生しました。ピアスに関わり始めて以来、許認可を受けるための書類作成に割いた努力が報われたとともに、これで来年、安心して第一期卒業生を送り出すことができます。

昨年9月末に始まった今年度は、「平



＜ ピアスでの授業風景 ＞

和学概論」、「紛争分析・解決論」「非暴力社会変革」、「住民組織化」、「組織内紛争マネジメント」等の講義を担当しました。「非暴力社会変革」では、まず、悪に対して無抵抗でいる「第一の道」でも暴力によって闘う「第二の道」でもない「第三の道」、すなわち、イエス・キリストが示されているところの、愛と非暴力に徹して悪に打ち勝つ道について学びました（ウォルター・ウィンク著『イエスと非暴力—第三の道—』）。その後、そのイエスの教えからも深く学び、非暴力による社会変革のために生涯を捧げたガンジーやキング牧師の思想と実践を学びました。

暴力紛争が止むことの無いアフリカ大湖地域において、非暴力による平和構築を構想し実践することは容易なことではありません。平和構築専攻コースに入ってくる学生たちですら、皆はじめは「非暴力で暴力に打ち勝つ？そんなこと不可能だ」、と答えます。そう思うのも仕方のないことかもしれません。なぜなら、暴力によらない体制変換を経験したこと

がない国がほとんどなのですから。

やがてこのピアスから、非暴力による平和構築のために働く人々が生まれることを夢見ながら、私はこれからも学生たちに、「非暴力による社会変革はアフリカでも可能なのか」、と問いかけ続けていくつもりです。

■ 大湖地域平和ネットワーク

5月24-26日の3日間、ピアスを会場に「アフリカ大湖地域平和ネットワーク会議」が開催されました。これは、ピアスの平和・紛争研究学科がスイス政府の支援を受け、企画・実施したものです。ルワンダ、コンゴ民主共和国（以下、「コンゴ民」）、ブルンジ、ウガンダで平和学コースを開設している7大学から計24名がピアスに集結し、教員や学生の交換・交流、共同研究、共同シンポの開催等について話し合いました。会議の終わりには、この地域の平和構築に取り組む研究者間のネットワーク強化の必要性が確認され、参加者の中から、私を含む4名がその調整役に選ばれました。

この会議の後、さっそく大学間の協力が始まりました。7月末の1週間、「コンゴ民」東部の中心都市ゴマの大学講師をされているドイツ人女性に、ピアスで「心的外傷からの回復」に関する集中講義をしていただきました。そして今、「コンゴ民」とルワンダの学生たちの交



＜平和ネットワーク会議の準備で訪れたコンゴ東部の大学のキャンパス内にある女性像
— 武装勢力による性暴力を忘れない、とのメッセージが込められている＞

流の実現に向けて動き始めています。

19年前にルワンダ難民が流入して以降、「コンゴ民」東部は暴力紛争が絶えず、世界最悪の紛争地域になっています。しかも、その紛争にルワンダの現政権に敵対する勢力と現政権と繋がり強い勢力がともに関与してきたため、コンゴ人の中には、ルワンダ人に対して敵対感情や不信感を持つ人々が少なくありません。一方、ルワンダ人の中には、「コンゴ民」の情報が非常に限られていることもあり、コンゴ人に対する偏見が強く、彼らの苦難に共感できる人々は限られています。



＜ 日本の学生グループとの交流 ＞

平和学を専攻する若者たちが国境を越えて出会い、共に学びながら信頼関係を作っていくことは、この地域の平和実現のために大切な取り組みになることでしょう。覚えてお祈りください。

■ 草の根「和解と共生」プログラム

現地パートナーであるNGOリーチによる草の根の和解と共生のプログラムも地道な歩みを続けています。前号でお伝えしたキレヘ郡「協働養豚プロジェクト」ですが、7月末までにガフゾ集落とルガンド集落にそれぞれ一つずつ、計2棟の豚舎が完成しました！このプロジェクトには、虐殺加害者、虐殺生存被害者、虐殺被害者の親族が参加していますが、彼らが力を合わせて作りあげた豚舎です。8月中には豚の飼育法に関する講習を実施し、完成した豚舎で豚の飼育を始めることになります。ブゲセラ郡で進めている「償い

の家造り」もまもなく1軒目が完成し、完成記念のお祝いが開かれる予定です。

リーチとピアスの共同も始まりました。昨年既に平和構築専攻の学生がリーチでインターンとして働きましたが、今年もその関係を継続します。また、来年卒業予定の第1期生のうちの一人が、リーチの「修復的正義による和解のミニストーリー」について現地調査をし、卒業論文としてまとめることになりました。その学生はジェノサイドで父親を失った虐殺生存被害者ですが、草の根の和解の現場から希望と勇気を見出してくれるようにと願っています。

ルワンダの人々の和解への歩みはこれからも続きます。過去に向き合い、また、お互いに向き合いながら、新しい未来を共に築いていくという、痛みの伴う歩みであり闘いです。どうか、これからも主イエスとその困難な歩みを共に歩んでくださるようにお祈りください。



< 完成した豚舎の一つ >

■ 心に蒔かれた希望の種子

8月6日の広島原爆記念日、「平和学概論」の授業のテーマがちょうど「強制力により平和を創れるか？」だったこともあり、原爆の被害について映像を交えて学生たちに話をしました。学生たちの一番の関心事は、広島・長崎の今、そして、「アメリカはどう謝罪したのか」、との問題でした。

大学から戻って夕食を取った後、家族

で『父と暮らせば』（井上ひさし原作、黒木和雄監督）という映画を観はじめました。愛する人々を原爆で失った後、生き残ったことに負い目を感じつつ生きる女性が主人公の物語りででした。ところが私は、その日の授業のこともあり、途中から重苦しい気持ちが込みあげ、最後まで観ることができなくなりました。

忘れることは出来ない。また、忘れるべきではない。しかし、どうしたらあの痛ましい記憶を癒すことができるのか。あらためて、広島・長崎、そしてルワンダの人々の苦しみと課題が重なっていることを思わされました。

癒しには長い時間が必要です。たとえ小さな裏切りでも、たとえ小さな加害でも、私たちは、自分を傷つけた人をなかなか赦すことができません。まして、肉親を殺したり、自分を深く傷つけた者をどうやって赦すことができるのでしょうか。キリストを信じるようになったから、すぐに傷が癒えるとか、憎しみが消え去る、といったものでもないでしょう。

けれども、私はキリスト者としてある一つのことを信じたいのです。それは、キリストに出会った人々の心には、今はどうのように真っ暗闇のような状況であろうと、心が憎しみや悲しみで埋もれてしまっているような状況であったとしても、すでにそこに希望の種子が蒔かれている、ということです。

今から10年以上前のある日、私はルワンダのある村で、ルワンダ政府が進めていた虐殺裁判に関して聞き取り調査をしていました。その裁判は、「和解をもたらす正義」とも呼ばれていた住民参加型のものでしたが、被害者や加害者、そしてその家族を含む様々な立場の人々の意見を把握するのが調査の目的でした。

その日お話しを聞いたご夫婦は、私がある刑務所で出合った虐殺加害者のご両親でしたが、そのお二人に裁判制度についての率直な意見をお聞きしました。すると、最初の30分程度は、「この裁判で

真実が明らかになるおかげで、被害者側の人たちとやっと和解ができる」、といった肯定的な答えが続きました。しかし、しばらくすると、そのお二人は突然前言を翻し、現政権による正義と和解政策の批判を始められたのでした。

そのきっかけは、後から帰宅した加害者の弟である中学生の男の子に私がある質問をしたことでした。私は、「きみにとって、正義ってどんなこと？」という質問を投げかけたのです。彼は少し考えた後、「正義とは公平という意味だと思う」、と答えました。すると突然、それを聞いた両親が、「公平なんてものがどこにあるんだ！」と声を荒げ、「私たちは、虐殺を犯した側として一方的に糾弾されている。でも、隣村では今の政府の兵隊によって多くの村人が殺されたんだ。けれど、それについては、何にも言えないじゃないか」、とまくしたてたのでした。

話が少しそれますが、私は、前政権が多数派フツの一般市民を動員して実施した「ツチに対するジェノサイド」と、現政権のルワンダ愛国戦線が犯したフツに対する殺戮や人権侵害を同列に論ずるつもりはありません。しかし、ルワンダに真の和解が実現するためには、前者ばかりでなく後者によって被害を受けた人々にも目を向け、「和解をもたらす正義」と癒しの取り組みをしていかなければなりません。しかし、その問題を公の場で



< 『償いの家造り』 >

は語ることでできないという厳しい現実があり、私はジレンマを感じながら働いているのです。

話を元に戻します。虐殺加害者の家族でありながら、自分たちは被害者でもある、とのご夫婦の訴えの後、その場に居合わせた加害者のおばさんがつぶやくように言いました。「ああ、あの人たちとも、あなたと同じように、心を開いて話すことができたならどんなにいいのに。そしたら、教会のミサの度に『主の平和』といって抱き合うけれど、そのことを心からできるのだけれど...」「あの人たち」とは、ジェノサイドを生き残った、ツチの虐殺生存被害者のことです。

聞き取りを終えて、その家を後にしようとしたところ、ご家族が口ぐちに、「今日は本当にありがとう」、「話ができて本当に良かった」と言われました。そして、帰りの長い山道を付き添って歩いてくださったのでした。

何が彼らをあれほどまでに嬉しくさせたのでしょうか？ 普段語ることが許されていない、心の中に閉じ込めていた思いを語ることができた喜びは大きかったはずですが、しかし、私は、それ以上の何かがあったと感じています。彼らはあの時、確かに「主にある希望」を垣間見たのです。「ああ、あの人たちとも、いつか『主の平和』と言って、心から抱き合うことができるのだけれど」と言ったとき、彼らはきっと、今は敵対関係にある虐殺生存被害者の人々と抱き合っている自分たちの姿を思い浮かべていたのです。

この家族のように、今はとても解決が見えるような状況にないとしても、いつかその時が必ず主によって与えられるのだということを信じて歩むことができたなら。キリストによる希望の種子が、すでに私たちの心に蒔かれている。その希望によって私たちは歩み続けることができるのです。

ルワンダの魅力

佐々木 恵 (ささき めぐみ)

皆さんお久しぶりです。前回ウブムエ21号では、ルワンダの自然の美しさを皆さんにお伝えしました。今回は、私の感じるもう一つのルワンダの魅力をお伝えしたいと思います。

それは、この国では、健全な人間関係が生活の中にしっかり存在しているということです。日本の中古ワゴン車を改造した乗り合いバスに乗ると、乗りあった隣の人と自然に会話が始まります。小さい子どもを複数連れた人が乗り込んでくると、横の人がその一人を自分の膝に乗せてくれますし、赤ちゃんをおんぶした人が乗り込んでくると、赤ちゃんが頭を低い入口にぶつけないように手をかざしてあげます。また、お年寄りがなかなかバスに乗り込めないでいると、さきに順番を待っていた人が、当たり前のように順番を譲ってあげます。日本では、すっかりなくなってしまった光景ではないでしょうか？満員でもシーンとして会話の始まることない通勤電車、優先席のはずなのに、お年寄りを前にして、若者が平気で座り込んでいます。日本に帰るたびに胸の痛くなる光景です。

また、ルワンダでは、孤児になった子どもたちを親族や知人が引き取って育てているケースがとてよく見られます。私の友人デニスさんも、ご自分の娘さんが4人いるのですが、そのほかに、ジェノサイドで両親を亡くした男の子とエイズで両親を亡くした男の子、そして事情があって母親と一緒に住めない男の子を自分の家族同様に育てています。日本でも戦後はこういうことが多くあったのでしょうか？経済的に余裕があるわけでもない彼らが、こうして生活の中で愛を実践している姿に頭の下がる思いです。

ルワンダにきて最初戸惑ったこと、それは人を招待することよりも、まず訪問



＜ ピース・インターナショナル・スクール
の子どもたちと ＞

することが大事なおつきあいだということでした。「今度遊びに行くね！」と言われたら、炭酸飲料かお茶はもちろんのこと、食事の用意をしておくことが期待されます。ルワンダに来てはじめてのころ、友人の家族がそういう風にして訪ねてくださったことがありました。招待もしていないのに不思議だなあ・・・と思いつつ、簡単なお茶とお菓子を用意していたところ、夕食の時間になっても、お帰りになるようすがないので不思議に思ったのですが、後でルワンダの文化を知り、本当に申し訳なく思ったものでした。ルワンダではこのように、自ら相手を訪問することで、そして、訪問される方は最善の準備をしておもてなしすることで友情を示しあうのです。

このような豊かな人間関係の中で暮らしていると、先進の科学技術は発展していても、日本の社会の中で希薄になってしまっている人間関係とその危うさ、核家族化の進行による社会問題がとてははっきりと見えてきて、本当の豊かさとはいったいなんだろう・・・？と、首をかきあげてしまうのです。

■ アフリカを旅立つ息子

約1週間前、久しぶりに家族5人がルワンダで揃いました。日本の大学に行って

いる長女の萌は、1年ぶり、ケニアに住む長男の仁と次男の共喜（ともき）は、7ヶ月ぶりの帰国です。彼らにとって、ブタレの家で過ごすのは初めてのこと。キガリと違い、中・高時代の友達がいないので退屈そうですが、私たち親にとっては、子どもたちが「そこ」にいることが嬉しい毎日です。

ところで仁は、7月にケニアの高校を卒業し、8月末からアメリカのニューヨーク州にある大学に進学します。仁は、和之が同じ大学に留学していた時にその地で生まれました。その「生まれ故郷」に帰ることになるとは言え、全く記憶にはない異国の地での生活です。新しい生活を始める彼のためにお祈りください。

また、もう一つ重ねてお祈りいただきたいことがあります。大学入学を控えての健康診断で、彼の心臓に疾患のあることがわかりました。今のところ日常生活に支障はありませんが、将来的には手術が必要になる可能性が高いということです。どうぞ、彼の健康のためにもお祈りください。

最後にうれしい報告も一つ。仁は卒業前にバプテスマを決心し、6月30日、学校の野外礼拝で14人の生徒と一緒に受浸しました。ケニアとはいえ、標高の高い地域にある学校の朝は肌寒く、ユーカリの大木に囲まれた野外のバプテストリーはとても冷たい空気に包まれていました。

「心臓の疾患が見つかり、得意のラグビーもできなくなるのではないかと心配したものの、不思議に病気に対する不安はなく、その中で主の導きと守りを確信した」、という信仰告白でした。彼の信仰が主に導かれ、これからも成長していくよう祈りたいと思います。



< 家族近影 2013年8月ルワンダにて >

平和に貢献する夢を掲げて

加藤 麗（かとう うらら）

「佐々木さんを支援する会」の皆さま、はじめまして。今3月から10ヶ月間、ピアスの平和・紛争研究学科で留学中の加藤麗（うらら）と申します。ルワンダに留学？と思われた方もいらっしゃると思いますが、今回はその動機、ルワンダの生活、ピアスでの学びについて簡単に紹介させて頂きたいと思っております。

私は東京外国語大学で3回生までアフリカ地域研究をしており、そこで最も関心が湧いたのが、ルワンダにおけるジェノサイド後の和解の実践でした。しかし、本や映画で手に入る情報はなんと少ないものか…。そんな最中に私にとって最大の幸運が佐々木先生との出会いでした。ルワンダの人々や学生に寄り添って本当

の和解を目指す活動に感銘を受けたのです。そして「現地でしか学べないことがある」という確信のもとに、先生のいらっしゃるピアスでの留学を決意するに至りました。

ルワンダの生活は、新しい発見に満ち溢れています。家族を第一に考え、貧しいながらも助けあい、気取らずにリラックスして生きている、そんなルワンダ人が私は大好きです。生活に関して不便さを感じることもありますが、それよりも「なくてもこんなに心が充実している」と思うことのほうが多いのです。何よりも、物質社会の日本で感じる疎外感や孤独をここで感じることは稀有です。道行く人と挨拶をしながら学校に向かい、家



＜ 非暴力コミュニケーションの授業での
ディスカッション ＞

に訪問した時には家族総出で歓迎してくれます。トゥラグクンダ（私たちは君のことが好きだ）という言葉をかけてくれることもよくあります。また、先生と恵さんがまるで家族のように暖かく接して下さるのが私の心の大きな支えです！

ピアスの日々も日本の大学とは全く異なります。積極的に意見を述べる学生が多く、ルワンダや近隣諸国の問題につい

て一緒に討論をする機会は日本では体験し得ないとても刺激的なものです。一方で多くの生徒は、昼は仕事、夜は学校という過酷な環境下にあり、学費を払えずに学校を去るケースも少なくありません。

また、19年経ってもジェノサイドは過去ではなく、人々の和解とはどれだけ難しく時間がかかるものか。実感することが多くあります。しかし、これからのルワンダを支える若い世代が「平和の文化」を学び、それを後世に伝えていくことによってこそ、未来に真の和解を見出させるのではないのでしょうか。今では一緒に学んでいる学生たちの多くが地域の平和に貢献するという夢を掲げています！

この国で肌の色や文化を超えた交流を通じて得たものは多く、何よりも心が充実した毎日です。皆さんも機会があれば是非ルワンダにお越し下さい！

事務局からお知らせ

- 佐々木和之さんは、10月下旬から約一ヵ月、西南学院大学神学部で特別講義、関東学院・

立教女学院等での講演を含め、各地で報告集会を持ちます。「支援する会」報告会は、11月10日(日) 16:00-東京・大井バプテスト教会でおこないます。ぜひご参加ください。

- 「佐々木さんを支援する会」立ち上げの際に、呼びかけ人となってくださった棚橋信之師（同盟教団レインボーチャペル前牧師）が7月5日に召天されました。佐々木さんが国際飢餓対策機構で働いている時から親交を持たれ、支えてくださいました。棚橋師のお支えを感謝し、ご家族・教会のみな様の上に主の慰めをお祈りいたします。

新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

(13年4月10日～13年7月31日)

小泉修、伊中めぐみ、中尾洋子、田中菜生子、笹谷志穂、関東学院小学校57回卒業生一同、上野恵、堺キリスト教会中高ユース科、久保田君代（以上敬称略、受付日付順）

- すべての支援者に「振替用紙」を同封しています。請求ではありませんのでご了承ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ） <http://rwanda-wakai.net/> 佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会可能。ブログ適時更新中。

- 世話人会 金子 敬（古賀教会牧師）、中條智子（三島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、村上千代（日本バプテスト女性連合幹事）、播磨 聡（広島教会牧師）